

International Culture Appreciation & Interchange Society, Inc.



一般社団法人

海外と文化を交流する会

(一社) 海外と文化を交流する会 会報

2017年6月発行 第62号



当会創立者・松岡 朝が第32代「ルーズベルト大統領夫人」を
1938年に表敬訪問した際に贈られた夫人のサイン付き写真

- 目次 ★「チャリティーコンサート」のご案内(P2)
★25点の日本画の首都キャンベラへの移管が決定(P2)
★「松岡 朝 物語」(仮称)第6回(P3)・第7回(P12) ★年度報告・計画(P20)

9月29日(金)
チャリティーコンサートのご案内
～ 箏(こと) とハープ ～
東洋と西洋の響きの出会い

第一部はハープや弦楽四重奏、そしてパイプオルガンによる西洋楽器での演奏。
第二部は、「箏(こと)」のソロ演奏と西洋楽器との合奏となり、他ではなかなか聴く機会のない豪華なコンサートです。「箏」は日本の伝統楽器で、「琴(きん)」の字をあてることもあります。が、「箏」と「琴」は別の楽器です。皆様が想像されている「琴」とは違い、大変パワフルで独創的な演奏をマクイーンさんがなさいます。非常に楽しいコンサートとなりますので、是非、ご家族やご友人をお誘いください。

日時：2017年9月29日(金) 開演18時30分より(開場：17時30分)

場所：霊南坂教会 東京都港区赤坂1-14-3

料金：4,000円(当日4,500円) / 大学生以下2,000円

出演：箏/マクイーン時田 深山 ハープ/有馬律子

弦楽四重奏/西山昌子、有馬玲子、千年美菜子、間瀬利雄

オルガン/飯靖子

25点の日本画の首都キャンベラへの移管が決定しました

当会が1977年にオーストラリア国民に贈った日本画巨匠たちの作品25点の受け入れ地として、首都キャンベラを希望していましたが、当時大きな国立美術館がキャンベラに存在しなかったため、これまでの40年間はヴィクトリア州メルボルンのNGV(National Gallery of Victoria)での保管となっておりました。しかしながら、平成28年2月のギッシュ会長、霧生理事、羽鳥理事3名による訪豪と現地の協力者達の協力が実り、平成29年春に首都キャンベラのNGA(National Gallery of Australia)への日本画25点の移管が決定しました。

これで晴れて日本画25点がオーストラリアの国有となりました。



■ Lesley Kehoe 女史 来日

また、本移管に関して現地でご尽力いただいているレスリー・キホー女史が5月中旬から6月上旬にかけて来日した際、ギッシュ会長と松岡裕子で歓談の時を持ち、引き続きの支援を改めてお願いしました。

2016年2月メルボルンの日本総領事館にて

キホー女史(左から3人目)に松岡朝賞を授与した時の写真

松岡朝物語(仮称) 第6回

第6回 満州——3つの国の狭間で

文/角山祥道

23

松岡朝は、帰国の途にあった。

念願の博士号を取得し、1932年(昭和7)6月にコロンビア大学の卒業式を終えた朝は、アメリカでの10年に及ぶ生活を畳み、父母の待つ日本へと戻ることになった。

朝の乗った秩父丸——2年前に処女航海を終えたばかりで、「太平洋の女王」と称えられた日本の豪華客船は、いつも以上に賑わっていた。この年の夏に行なわれたロサンゼルスオリンピックの日本選手団が同船していたからだ。もちろん、朝も選手団も、「太平洋の女王」がのちに軍に徴用され、1943年(昭和18)3月、フィリピン沖で雷撃を受け沈没することを知る由もない。



秩父丸の船上にて

ロサンゼルスオリンピック——夏季五輪10回目となる大会である。しかし、ヨーロッパから遠隔地だったことと、世界恐慌の影響が相まって、参加選手も参加国も激減した中での開催であった。

この五輪に花を添えたのは、192人の大選手団を派遣した日本だった。前年の満州事変、そして1932年3月1日の「満州国」建国宣言。国際世論は日本に批判的だったが、軍服姿で開会式を行進した選手たちは奮闘した。男子競泳では6種目中5種目で日本選手が優勝。南部忠平が三段跳びで優勝するなど、金メダル7個、銀メダル7個、銅メダル4個という大躍進だった。

中でもアメリカ中の注目を集めたのは、馬術の西竹一だった。男爵(=バロン)の子息だったこと

から、「バロン西」と呼ばれた西は、馬術大賞典障害飛越競技に出場し、愛馬ウラヌス号を駆って、見事金メダルを獲得したのだった。西は金メダルを受け取ると、「優勝できたのはウラヌスのおかげだ」とメダルを愛馬に捧げた。この行為は、騎士道精神と賞賛され、バロン西の名は、全米中に轟いたのだった。

陸軍の騎兵将校だった西は、戦争末期、戦車第26連隊長として硫黄島に着任する。西は愛馬ウラヌス号のたてがみを肌身離さず持っていたという。日本軍の中にバロン西がいることを知ったアメリカ軍は、包囲する日本軍に向かって呼びかけた。

「バロン西、貴下はロサンゼルスで限りなき名誉を受けた。降伏は恥辱ではない。われわれは勇戦した貴下を、最大限の尊敬をもって迎えるだろう」

だが西は、投降することなく、2万を超える日本兵と共に硫黄島で散った。

朝は、選手団に混じって、立派な口ひげを蓄えた嘉納治五郎氏の姿を見つけた。

嘉納治五郎は講道館柔道の創始者であり、アジアで最初のIOC（国際オリンピック委員会）委員に就任するなど、国際的にも知られた人物だった。

この時実は、嘉納治五郎は東京五輪招致のために奔走しているところだった。

「近代オリンピックは、広く世界の人々が参加できるようにするために始められたのだから、欧米だけのオリンピックであってはならない」と、嘉納は欧米の有力者に、公式非公式に会い、日本開催を力説した。日本が開催を目指す1940年（昭和15）は、神武天皇の即位から2600年目に当たるとされたことから、日本政府は早くから紀元二千六百年記念行事の目玉として、東京五輪招致を目論んでいたのだ。

嘉納らの奮闘もあって、1936年（昭和11）のIOCにて、東京開催が決定し、国民は喝采を送った。だが日中戦争の激化により、資材の調達が困難となり、結局、軍部の反対により五輪は中止となる。アジア初、有色人種国家初の五輪は、幻と終わるのである。

朝は、船の中で居心地の悪さを感じていた。

サンフランシスコと横浜を結ぶ秩父丸に同船していたのは、日本人ばかりではない。アメリカ人を含め、多くの外国人が乗っていた。

当時の日本人、またはアメリカ人は、悲劇の大きさを殆ど理解していなかった。しかし満州事変に始まる「何ともいえない不安」を、両国を行き来する旅人たちは容易に感じ取っていた。朝もまた、そのひとりだった。そして、アメリカ人の怒りの波が、時と共に大きくなっていっていることを、朝は肌身に感じていた。

喜劇王・チャップリンが日本を訪れ、凄まじいブームになるろうが、ロサンゼルスオリンピックでバロン西が賞賛を浴びようが、日本の中国政策がすべてを台なしにしていたのだ。

事実、日本の中国進出を重く見た国際連盟は、満州事変の調査のため、リットン調査団を満州に送り込む。しかし日本軍はことごとく調査を妨害。のちにリットンは、満洲滞在中の印象を「悪夢だった」と語っている。

日本国内に目を向ければ、「日本は中国から手を引くべきだ」との持論を持っていた犬養毅首相が、海軍の青年将校たちによって惨殺された。五・一五事件である。世論は、犬養よりも、むしろ満州に進出せんとする軍部を支持した。不況に喘いでいた国民は、満州国が日本の経済状況を好転させると信じたのだ。何よりも経済を選んだのである。

リットン調査団は最終的に、一連の満州での日本軍の軍事行動は「自衛とは認められない」と断定し、「満州国は満州在住の中国人の自発的な意志によって成立したものではない」と、日本の主張を完全に否認する調査書を国連に提出した。国連がそれを承認したのは言うまでもない。

「アメリカと日本は、西洋と東洋を結ぶ相互理解の橋でなければならない」

朝はアメリカで学び始めた頃から、そう考えていた。

だがすでに、地理的には遠く離れているにも関わらず、アメリカと日本、両国の運命はすでに太平洋の深いところでもつれていた。朝にはそれがはっきりとわかった。

このままではいけない。

朝はもどかしかった。しかし、か弱いひとりの人間に、いったい何ができよう。

朝が考えるに、今、中国で起こっている問題は、日本と中国の二国間の事件ではない。

悲劇には必ず理由がある。現在の世界に広がっている問題の多くは、第一次大戦後に結ばれたヴェルサイユ条約の失敗にあることは間違いない。実際、ドイツでは、反ヴェルサイユ条約を掲げたヒトラー率いるナチスが躍進しているのではないか。中国に関しても、今の混乱の一因は、少なくとも100年前に遡る。欧米列強が、250年以上鎖国してきた日本を無理矢理開国させ、中国のあちこちに租界——植民地を作ったのではないか。日本も中国も、欧米によって強引に目を覚まされたのである。その混乱が、今も続いているのだ。

秩父丸が太平洋を静かに航行している間、客の話題は専ら、満州だった。誰もが正確な情報を求めて、腹を探り合っていた。

真実を知るためには、この目で見るしかない。

朝は、満州へ行きたいと強く願った。

24

満州へ行く機会は、朝が思ったよりもずっと早い時期に訪れた。

朝は帰国してから、母校である横浜の共立女学校（現・横浜共立学園中学校・高等学校）で教鞭をとっていた。さらには、正倉院の曝涼でもお世話になった東伏見妃殿下から、朝は直接、進講係りを仰せつかった。朝にとっても緊張を強いられる講義であったが、世間からは驚きの目で迎えられ、朝日新聞には、「東伏見宮妃殿下へ松岡女史ご進講」の記事（1932年10月10日）が掲載された。

そんな折、朝は、満州国の要人、^{ていなんしゅう}丁鑑修（幹元）に面会する幸運を手に入れた。丁氏は早稲田大学経済学科を卒業し、日本語にも堪能な紳士だった。満州国が成立すると、すぐに中枢のひとりとなり、交通部総長（のちの交通部大臣）などを歴任した。その丁氏と会うことが叶ったのだ。

丁氏は学究肌の静かな紳士で、朝には温かな人柄の人のように思われた。朝は思い切って、自分の考えを述べた。

「アメリカでは、満州国と日本への反発が大きくなっています。アメリカにおける日本理解を拡大するためには、私は前向きな努力が必要だと考えます」

丁鑑修氏は、朝の話に注意深く耳を傾けた。そして静かに口を開いた。

「アメリカは巨大な国ですが、東洋とは大きくかけ離れています。東洋について無知に等しい。アメリカ人は、東アジアにおける複雑な事情について、ありのままの状態を知る機会がほとんどないのです。彼らが東アジアを知る機会は、東アジアで活動する伝道師や宣教師が送ってくるレポートだけです。そして彼らが中国または日本について送るレポートは、必然的に事実が潤色されています。これは仕方のないことです」

丁氏は続けた。

「この状況を変えるには、西洋の概念をよくわかっているアジア人が、アメリカ人に直接話をする必要があるのです」

朝は大きく頷いた。丁氏はそれを見て、朝に投げかけた。
「松岡博士、なぜあなたは満州へ行ってご自分の目で確かめないのですか。行ってらっしゃい。私が摂政の宮であるヘンリー溥儀へ紹介状を書きましょう。それから肅第 13 王女にぜひ会ってください。彼女はおそらく 23 歳か 24 歳です。英語を話せる方ですよ」

ヘンリー溥儀とは英名であり、本名を愛新覺羅溥儀という。清朝のラストエンペラーであり、のちに満州国の初代皇帝となったあの溥儀である。

肅王女とは、清の皇族である肅親王（愛新覺羅善耆）の娘で、17 人いる王女のうち、第 14 王女は、「男装の麗人」、「東洋のマタ・ハリ」と言われた川島芳子である。川島芳子は、日本軍の工作員として諜報活動に従事し、戦後、中華民国政府によって銃殺された。第 13 王女は川島芳子の異母姉にあたる。

丁氏は、朝を王女に会わせたい理由を語った。

「第 13 王女と一緒に、松岡博士にはアメリカを旅行して欲しいのです。もしあなた方 2 人でアメリカの婦人たちと会話をなされれば、今日の問題の原因となっているこの地域の歴史的な問題が明らかにされ、誤解が解けるでしょう」

それは朝の心にぐっとくる申し出だった。

満州国事変について朝が知っていたことは、スプリングフィールドでのアメリカの新聞からの記事に限られていた。朝は母国の真実を心底知りたかった。そして、アメリカをよく知り、かつ愛しているひとりの日本人として、アメリカにいる友人たちに根拠ある話をしたいと思っていた。そのためには、この目で満州を確かめる必要があった。丁氏の提案は願ったり叶ったりだった。

25

朝はすぐに、父親の健一に相談した。貿易商だった健一は、朝から見ても、良きアドバイザーであり、良きガイドだった。健一はすぐにツテを辿って、外務省の人間にこのことを相談した。満州行きは危険な旅には違いなかったが、健一は、朝が自分の目で見ることのほうが大事だと考えていた。

1933 年（昭和 8）、朝にとって 3 つ目となる国への旅が始まった。

目的地は長春（新京）。満州の新しい首都である。古くからの友人で、大連にある南満州鉄道のホテル部門の部長が、長春のヤマトホテルに心地よい部屋を探してくれた。

満州は、朝を温かく迎え入れてくれた。アメリカにおける朝の歩みが友情で守られていたように、満州国でもそれは同様だった。

だが、すぐに溥儀や第 13 王女に会えたわけではなかった。一介の民間人が会えるほど簡単な話ではなかった。朝はさまざまなツテを辿って、溥儀への面会を求めた。

朝に手を差し伸べてくれたのは、他の誰でもない、実の父親だった。ヤマトホテルにかかってきた父・健一からの電話は、朝が待ち望んでいるものだった。

この時健一は、朝とは別に、仕事で満州のハルビンにいた。樺山愛輔伯爵と会うためである。

樺山愛輔は、日清戦争にも従軍した軍人・樺山資紀の長男である。樺山資紀は、海軍大臣や内務大臣、初代台湾総督を歴任した大物だ。樺山愛輔自身も、のちに国際文化会館理事長や、ロックフェラー財団などの国際的文化事業に関わった人物で、日本の美術品の国際的に有名なパトロンでもあった。美術品の輸出入絡みで、樺山愛輔と健一は面識があったのだ。ちなみに愛輔の二女・正子は、白洲次郎の妻、白洲正子である。彼女もまた、日本の美についての理解が深く、多くの随筆を著した。

健一が樺山愛輔伯爵と会ったのには、大きな理由があった。樺山と同じ薩摩藩士の出で親類でもあった陸軍の菱刈隆が、この時の関東軍司令官だったのだ。関東軍司令官は駐満大使を兼任していた。健一は、樺山伯爵に菱刈司令官への口添えを頼んだのである。朝が溥儀と会うためには、菱刈らの許可が必要だった。父・健一からの電話は、菱刈隆関東軍司令官と朝との面会が叶ったという連絡だった。

朝は早速、関東軍の本部に赴くと、司令官に次のように告げた。

「私は、アメリカと日本の間の友好関係に寄与したいと考えております。そのために満州のことを知りたいと、この地に参りました」

「わかった。話は聞いている。溥儀に個人的に会えるよう取りはかろう」

司令官は鷹揚に頷いた。

時すでに1934年（昭和9）になっていた。

朝は、「勤民楼」と呼ばれている宮殿に向かった。黒い壁の2階建ての建物で、正面には緑色のドームが乗っている。朝は勤民楼の長い廊下を抜けて、謁見の間に向かった。その隣の控えの間には、中国の陸軍軍人たちが大勢詰めていた。彼らの胸にはいくつもの勲章が下がり、輝きを放っていた。

朝は名を呼ばれ、謁見の間に入った。

そこにいたのは、明るい表情をした青いスーツを着た青年だった。当時28歳——朝よりひと回り以上年下の青年。それが、このあとすぐに満州国初代皇帝となる溥儀だった。この時点ではまだ、「摂政の宮」と呼ばれていた。

朝が深々とお辞儀をすると、溥儀は「もっと近くに来るように」と朝を招いた。朝は、問われるまま、アメリカでの留学経験を語った。溥儀はことのほか関心を示し、特に、朝が肅第13王女のお伴をしてアメリカを訪問するというプランに、興味をもってくれた。

「渡米を許しましょう。しかし、その費用が問題です。日本のお役所が負担してくれるでしょうか。この件に関して責任者の方々と相談してください」

溥儀は朝に、満州国の初代国務院総理である鄭孝胥ていこうしよに会うように勧めてくれた。

「鄭孝胥はもう年配ですが、しかし、私を小さな頃から育ててくれた恩人です。私の名前を告げれば、あなたを必ず受け入れてくれるでしょう」

26

鄭孝胥国務院総理に会う前に、朝は肅第13王女に面会した。彼女は長身のチャーミングな女性で、彼女の話す英語の発音はなめらかだった。

彼女は誰からも「サーティーンズ・レディ」と呼ばれていた。第13王女なので、「13番目のレディ」というわけだ。すでに、アメリカ行きの話は、丁鑑修大臣を通じて第13王女をはじめ関係者に伝わっており、旅の準備も終わっていた。

彼女は、衣装ダンスの中いっぱい、得も言われぬ宝石や王冠、そして満州王女の豪華なローブ（式服）を用意していた。一度、朝の目の前で正装をしてくれたが、宝冠をつけた頭部から、精妙なサンダルを履いた足元に至るまで、その姿は、筆舌に尽くし難かった。

きっとアメリカ人も、「サーティーンズ・レディ」をこの目で見たら驚くに違いない。彼女は別世界からやってきた異国の生き物のように見えるだろう。

朝はそう思った。それほどに、第13王女は素晴らしかった。

しかし事は単純に進まなかった。

溥儀が「諾」と口にしたところで、関東軍の許可がなければ動かない。軍の許可を得るには、多くの決裁を必要とした。軍は、会社とも大学とも異なる独自の組織だった。

菱刈関東軍司令官の男性秘書官は、そんな朝を気の毒がった。

「軍隊に近づくには男性でなければなりません。ここでは女性は重きを置かれないのです。私があなたの代わりを喜んで務めましょう」

秘書官はいろいろと手を尽くしてくれたが、結局、鄭孝胥国務院総理に会うまでに2週間近くを要した。

鄭孝胥氏は、長身の老人だった。朝より、30以上年上だろうか。

聞くと、毎朝5時に起床し、中国式のやり方で天と地の神に祈りを捧げ、平和な国家と溥儀の健康を祈る。祈りを捧げたあとは、筆記用具を手に取り、硯に水を注ぎ、墨をする。上等の毛筆を墨に浸し、優雅な中国文字でその日の思いを書き記す。

芥川龍之介は1921年(大正10)、この老人に上海で会っている。その時のことを、芥川はこう記す(「上海游記」『上海游記・江南游記』所収、講談社文芸文庫)。

〈氏は一見した所、老人に似合わず血色が好い。眼も^{ほん}殆ど青年のように、朗らかな光を帯びている。〉

〈鄭孝胥氏は政治的には、現代の支那に絶望していた。支那は共和に執する限り、永久に混乱は免れ得ない。が、王政を行うとしても、当面の難局を切り抜けるには、英雄の出現を待つばかりである。その英雄も現代では、同時に又利害の錯綜した国際関係に処さなければならぬ。して見れば英雄の出現を待つのは、奇蹟の出現を待つものである。〉

はたして奇蹟は起こったのか。鄭孝胥の前に現れたのは関東軍であり、溥儀であったはずだが、はたしてそれは真の英雄だったのか。

鄭氏は、朝に「何か紙はないか」と聞いてきた。朝が、手帳を差し出すと、彼は自分の詩を数行書き加えてくれた。おおよその意味は次のようなものである。

〈私は“箕”と“斗”の星を愛す。しかし、それより彗星——ほうき星が好きだ。何故なら、そのほうきを借りて、私の心の中に積み重なっている塵芥を掃き清めたいから〉

箕とは、中国の星座「二十八宿」の「箕宿」のこと。東方七宿の最後の星宿だ。そして箕宿と隣り

合っているのが、斗——「斗宿」だ。北方七宿に属し、南の空にあって北斗七星と対をなすことから南斗六星とも呼ばれる。箕と斗。方角で言えば北東。つまり鄭氏は中国の北東——満州の地を愛す、と言っているのだ。さらに、北斗七星が死を司るのに対し、南斗六星は生を象徴する。満州よ、永遠に——「箕”と“斗”の星を愛す」という言葉には、鄭氏の満州への思いが込められていた。

だが満州がままならないことも、鄭氏はわかっている。心は晴れやかにならず、塵芥ばかりが積もっていく。この塵芥をほうきで掃きたい。自分たちの満州を取り戻したい。鄭氏は謎めいた詩で、自身の苦悩を伝えていたのだ。

朝は、この英知の塊のような、物静かな老人を通して、溥儀の置かれている状況、鄭氏の立場、満

州政府の状態について彼らがどう思っているのか、臆気ながら見えてきた。

朝が感じていた通り、満州国は関東軍の支配下にあった。重要な決断はすべて軍によってなされ、何もかも軍の手中にあった。まさに、満州国は、操り人形の政権であった。

「松岡博士、なぜあなたは満州へ行ってご自分の目で確かめないのですか」

丁大臣の言葉が、今更ながら思い出された。

自分の目で確かめろ——彼の言葉は、このことを暗示していたのだろうか。

朝は、丁大臣が言葉に込めた意味をはっきりと悟った。

サーティーンズ・レディとの渡米も、結局、関東軍に握りつぶされてしまった。司令官の秘書官は、申し訳なさそうに言った。

「私はあなたに心より同情します。訪米は、日本と満州にとって有益なことでしたが……」

言葉には敢えて出さなかったが、朝はこの結論を予期していた。なぜならば、満州国政府には、自分たちの自由に使える予算がほとんどなかったからだ。そしてそのことを、朝は知らされていた。

27

満州に滞在している間に、もうひとつの悲しいニュースが朝を襲った。第一報は、ラジオからだった。1933年（昭和8）10月15日、新渡戸稲造博士がカナダで倒れ、帰らぬ人となったというニュースだった。

朝は、新渡戸稲造博士とは浅からぬ縁があった。

新渡戸稲造は、1920年（大正9）から1926年（大正15）まで、設立されたばかりの国際連盟事務局次長を務めたことで知られる。教育者であり、英語で発表された『武士道』の著者として国際的な名声を得ていた新渡戸こそ、事務局次長の任に相応しいと、白羽の矢が立ったのである。元より、「太平洋の橋たらん」との信念のもとに活動していた新渡戸は、その要請を快諾し、重職を勤め上げた。事務局次長時代の新渡戸に、朝は、マサチューセッツ州にあるウィリアムズ大学で毎年開催されているセミナーへの参加を取りはからってもらったこともあった。

朝が最後に新渡戸博士と話したのは、1933年の夏、博士が渡米する直前のことだった。満州事変勃発以降、アメリカでは日本批判が渦巻いていた。その誤解を何とか解けないか、というのが、博士の考えだった。

しかし皮肉なことに、新渡戸自身は、日本国内で売国奴の如く叩かれていた。

1932（昭和7）年2月、松山市（愛媛県）で講演の後、地元新聞記者との会話の中で、新渡戸はこう漏らす。

「我が国を滅ぼすのは共産党と軍閥である。そのどちらが怖いかと問われたら今では軍閥と答えねばならない」

オフレコだったにも関わらず、地元紙はこの発言を大々的にかつ執拗に報道。「新渡戸氏の自決を促す」とまで書き立てた。他のマスコミの多くは、これに乗じて新渡戸を批難。ついには、新渡戸が入院していた病院に、軍人や右翼が押しかける騒ぎとなった。いわゆる松山事件である。

この頃の新渡戸は、こんな歌を詠んでいる。

〈国を思ひ 世を憂うればこそ 何事も 忍ぶ心は 神ぞ知るらん〉

実際、新渡戸の世を憂う心を、日本人の多くは、顧みようとしなかった。

1933年3月、リットン調査団の報告書に腹を立てた日本政府は、国際連盟を脱退してしまう。世

界平和のため、新渡戸が心血を注いだ国際連盟を、母国が踏みにじったのである。

それでも新渡戸は、アメリカに渡り、日本の誤解を解こうと講演をして回った。満州事変や国連脱退の批判を一身に受けるにも関わらず。国内では、「自決せよ」とまで罵られているにも関わらず。

1933年の夏、朝は横浜で、新渡戸博士とアメリカについて言葉を交わした。どちらも、日米関係の悪化を気に病んでいた。

「朝さん、いつか一緒にアメリカへ行きましょう」

博士は、憤る朝を慰めるように、語りかけた。

「あなたは日本の美術について、お話しなさい。私はその文化的な歴史について話しましょう。アメリカの立派な聴衆は、きっと私たちの話に耳を傾けてくれるでしょう」

博士は朝に、平均的なアメリカ人にとって、東洋はまだまだはるかに遠い存在であることを教えてくれた。東アジアの地理と文明は、アジア人でも区別し見分けるのは難しい。なおさらアメリカ人たちは、中国人、朝鮮人、日本人を、見た目でははっきりと見分けられないのだ、と。そして中国、朝鮮、そして日本の文化は、お互いに大きく影響しあっている。アメリカはその根源にあるイギリスの文化に加えて、インディアン、メキシコ、スペイン、そしてフランス文化の要素が入り混じり、それが現在のユニークな文化を形成している、と。

博士の言葉は、朝の目を見開かせてくれた。新渡戸稲造博士は、朝にとって目指すべき指針だった。

「太平洋問題調査会」は、「太平洋の橋たらん」との新渡戸の信念を実現させるべく、太平洋地域に利害関係を有する諸国家・諸民族の相互理解と正確な情報交換を目的に設立した国際的な調査団だ。

1933年10月、太平洋問題調査会の会合に出席した新渡戸は、会合で国際平和を訴えるもその願い叶わず、カナダの地で病床に臥し、そのまま逝ってしまったのである。

28

日本への帰国が迫ったある日、朝は、鄭孝胥国務院総理と再び面会する機会を得た。

「あなたの計画した渡米について、私は何もかも知っています。あなたの計画が実現しなかったのは残念でした。しかし、ひとつだけ喜ぶべきことがあります。あなたは日本人であり、私は中国人ですが、私たちはお互いにひとつのことで意見が一致しています。アメリカの国民は、ここで本当に何が起きているかを知りたいのです」

鄭氏は、穏やかな笑みを浮かべると、話を続けた。

「そして私たち中国人はそのことをはっきりとわかっていますが、あなた方、日本の役人は、アメリカに伝える重要性を理解していないのです。朝さん、どうしたらいいですかね。私には何もできませんが……」

朝は一拍置いてから、言葉を継いだ。

「この渡米がだめになっても、何か他のことをしなければなりません。アメリカと日本がより良く理解できるようにする夢を、私はあきらめません。私にはこれが、生涯かけて行なうべきライフワークだと感じるのです」

朝は鄭氏の顔を真っ正面から見つめた。

「もっと正確には多分、この使命は、父から受け継いだものではないかと思います。私が幼い頃から、父が教えてくれていたのです。日本はアメリカに対して大きな借りがあるのだと。アメリカが日本にしてくれたすべてのことに対して、借りを返さねばならぬと」

朝は父・健一から、事あるごとにアメリカの話が聞かされていた。

「アメリカはずっと私たちの友達だったのだよ」

健一が例に挙げたのは、1923年（大正12）の関東大震災だ。

「誰が私たちを最初に救いに来てくれたと思う？ アメリカ人たちだったんだよ、朝。彼らは、フィリピンから救急品をもって駆けつけてくれたんだよ」

「アメリカ人が何度も何度も日本に示してくれた同情を忘れてはいけない」と、健一は続けた。

「彼らは大きくて忙しい国だ。だから、普通のアメリカ人は、アジアでの一連の事件については、はっきりわかっていないのだよ。宣教師たち、とくに極東にいたほとんどの旅行者は、大抵、ある種の偏見を持っている。彼らは彼らが理想とする社会を創り作り上げようと身を捧げている。彼らのレポートが物事を実際の姿より、こうあるべきだというひとつの結論に導いてしまいがちなのは、避けられないことだったのだよ」

彼らの宗教的理想から外れたこと、理解できないことは、より批判に晒されるということだ。だがここはアジアであり、アメリカではない。一方、中国と日本の関係は、アメリカのそれとはまた異なる。中国と日本の結びつきは古く、そして深い。

健一はよく、日本の古い諺を持ち出した。

〈葦の髄から天井を覗く〉

細い葦の穴から、天井を見ているのに、その天井を全体だと思い込む。自分の狭い見識で世界を判断するなど、健一は朝を諷めたのだ。

「朝、あなたは日本で生まれ、アメリカで学んだという特別な背景を持っている。あなたには義務があるのだよ。日本とアメリカの間の理解を育むという義務が。私は朝、あなたをアメリカで教育した。ひとりの少女がアメリカと日本人の心を結ぶ一本の紐となるようにとの願いを込めてね」

朝は、鄭孝胥國務院総理に告げた。

「私はひとりでアメリカに行きます。それが私の義務だと思っています」

29

そんな朝に、思ってもいない依頼が舞い込んだ。

外務省の意を受けた汎太平洋協会が、アメリカ教育協会との交流への答礼という形で、アメリカに日本人を送り込もうとしていたのだ。アメリカの反日世論を何とか押さえることができないか、と考えた外務省の窮余の策だった。アメリカを知り、日本文化を理解している朝は、まさにうってつけの人材だった。

朝は、アメリカ行きを決めた。太平洋の向こうに、朝の使命があった。

健一は、アメリカに旅立つ娘のために、プレゼントを用意していた。

長女の啓子——朝の姉を、伊勢神宮に向かわせたのだ。

神宮は、日本人にとって最も大切な場所のひとつである。天照大神あまてらすおおみかみの孫である、邇邇芸命にじぎのむすことが天孫降臨して、日本は始まったのだと神話は伝える。邇邇芸命は、高天原から地上に降り、高千穂に向かったと伝わる。やがて神は皇室の祖となり、天照大神を神宮に祀った。今でも、皇室の人間が結婚する際は、神宮に参拝し、報告する。

古来より、この地は、日本人ならば一度は訪れたい場所であり、最も神聖な場所だ。太陽の女神である天照大神は、皇室の祖——つまり、日本人全員の祖であるということだ。啓子は、父の命を受け、自分たちの先祖の御霊に対して、妹の朝の旅行目的を述べ、その旅の安全を祈願したのである。

これほど素晴らしい贈り物があるだろうか。

朝は、乗船前にそのことを聞き、遠く神宮に向かって頭を下げた。

今回の渡米は、これまでとは違うことを、誰もがわかっていたのだ。もうすでに、アメリカは、朝を優しく迎えてくれた国ではない。長引く中国問題のせいで、アメリカ人の多くは反日感情を抱いていた。新渡戸博士すら罵倒する国に、朝はひとり乗り込むのである。

1938年（昭和13）——朝、45歳。覚悟の渡米だった。

松岡朝物語（仮称） 第7回

第7回 架橋——アメリカ行脚（前編）

文／角山祥道

30

1938年（昭和13）1月。松岡朝にとって、3度目のアメリカだった。

1度目も2度目も、渡航は「希望」と同義だった。だが今回は違う。心なしか、いつもは穏やかな太平洋の波が荒れているように感じた。

「あなたは日本人？ それとも中国の方？」

日本からアメリカへ向かう大洋丸のデッキで、朝はひとりのアメリカ人女性から尋ねられた。朝が事情を説明しようとする、朝が日本人であることを知った女性は、話を最後まで聞かず、言い放った。

「アメリカのホテルは、どこもあなたに部屋を提供しないでしょうね」

朝はまともに取り合ってはだめだと思い、冗談で返した。

「もしホテルが泊めてくれなければ、私は道端で寝ます。アメリカ社会はたいへん親切ですから、きっとおまわりさんが私の面倒をみってくれることでしょう」

朝はこれからのアメリカ生活に不安を覚えたが、この女性との会話は無駄ではなかった。彼女から、大洋丸にボートン夫妻という興味深い乗客が同船していることを耳にしたのだ。ボートン夫妻は上海に滞在経験を持っていた。朝はボートン夫人を見つけると、意を決して近づいた。

「アメリカへお帰りになるんですか？」

「ええ、上海で1年ほど過ごしたんです。あなたは日本の方？」

「はい。新教育協会の仕事でアメリカに行くところなんです。ところで上海では面白いことをたくさんご覧になったのでしょうか？」

ボートン夫人は頷いた。

「日本の戦闘機が何機も爆弾を落とすのを見ましたよ。狙いを定めた所を目指して、パイロットが危険を顧みず低空飛行をしていました。夫と私で『あのパイロットたちは命知らずだね』と言っていたのです」

朝は話題を変えた。

「あなたは東部アメリカの大学——もしかしてヴァッサー・カレッジにいらしたでしょう？」

「ええ、でもどうしてご存知なの？」

ボートン夫人は驚いたようだった。

「私はコロンビア大学のバーナード・カレッジに通いました。教師の経験上、学校にはそれぞれ独特の気風があるのを知っています。あなたのその上品な感じは、ヴァッサー・カレッジじゃないかと」

朝はボートン夫人とすっかり打ち解けた。一方のヒュー・ボートン氏は、荒れた波で船酔いし、気分が優れずずっと客室で休んでいた。朝はボートン氏のために、日本から持ってきた小さな日本人形をプレゼントした。

朝にとって、ボートン夫妻は小さな救いだった。

敬虔なクエーカーの家庭に育ったヒュー・ボートン氏は、朝と同じコロンビア大学で学んでおり、東京帝国大学への留学経験もあった。この当時は、コロンビア大学准教授の任にあった。余談だが、のちにヒュー・ボートン氏はアメリカ国務省の役人として、戦後日本の占領政策に大きく関わることになる。ボートン氏がマッカーサーに提出した覚書によって、昭和天皇の地位保全が叶ったという研究者もおり、また、憲法9条の平和主義に関しても、ボートン氏の思想が色濃く繁栄されたとする指摘もある。

朝は船上パーティで、日本人の乗客と一緒に「東京音頭」を踊った。「東京音頭」は1932年（昭和7）に作られ、翌年レコード化されると、すぐに100万枚を突破した大ヒット曲だ。朝は浴衣を着て、他の日本人の見様見真似で踊った。

曲が終わると、ボートン夫妻が大きな拍手を送ってくれた。朝がボートン夫妻のテーブルに行くと、口々に絶賛してくれた。

「朝さん、シカゴの私たちの家を訪ねてください。私たちにできることなら、どんなことでもお役に立ちますよ」

大洋丸は、サンフランシスコの港へと入っていった。

朝はゴールデン・ゲート・ブリッジ——金門橋に目を奪われた。全長2737メートル、主塔の高さは水面から227メートル。当時、「世界一長い吊り橋、の名を誇った朱色の橋だ。前年の1937年に完成したばかりで、朝が橋の全貌を目にするのは初めてだった。

朝は、デッキのいちばん高いところから、金門橋を見上げた。

「前に広がる運命は、まるで待ち構えるクモみたい」

朝は、さまざまな不安で押しつぶされそうになった。日本、中国、アメリカ……3つの国は、「戦争」という複雑なクモの巣に編み込まれていた。クモの巣を払う——それが朝の願いだった。

アメリカと日本——。朝にとって、どちらも大切な国だ。だが、満州事変から始まる日本の対中戦略で、この2国の間はいまだかつてないほど広がっていた。

「私はアメリカと日本の間に、ゴールデン・ゲート・ブリッジより立派な橋をかけなければならない——」

朝は、金門橋の堂々たるシルエットを見上げながら、涙が頬を伝わっていくのを感じた。朝は祈った。

「神さま、私に力をお与えください」

1938年（昭和13）という年は、日本が戦争にのめり込み、すでに引き返せなくなった時期だ。この年、国家総動員法が公布され、日本人の生活は政府の統制下に置かれた。灯火管制規則も定められ、

覆い笠や黒塗りの電球が発売された。ヨーロッパではドイツのヒトラーが統帥権を掌握、3月にはオーストリアを併合する。

この年に、芥川賞作家の火野葦平は、小説『麦と兵隊』を発表する。日中戦争に従軍した火野による、1ヶ月間の戦争の記録だ。〈今、私は、既に、一日終る迄私の生命があるかどうか判らなくなった〉というギリギリの中で書かれたものだ。

〈縛られた三人の支那兵はその壕の前にして坐らされた。後に廻った一人の曹長が軍刀を抜いた。掛け声と共に打ち降すと、首は毬のように飛び、血が藪のように噴き出して、次々に三人の支那兵は死んだ〉

日本兵は、誰が数多く中国人を斬るか競争し、日本の新聞はそれを「百人斬り競争」として賞賛した。だがそれは国内での話だ。欧米では、こうした「百人斬り競争」をはじめとする日本兵の残虐ぶりが報道され、日本は批判にさらされていた。

事実、朝が訪れたアメリカでは、日本の生糸不買運動が激しくなっていた。

「日本のシルク（生糸）を買うな」

デモ隊が掲げているプラカードにはそう書かれていて、そこには絹のストッキングがぶらさがっていた。プラカード裏側にはさらに、

「日本製品を買うと、支那人が幽霊になって墓から抜け出てきて、つきまとうぞ」

と、ガイコツのイラスト付で主張していた。

朝がホテルでラジオをつければ、アナウンサーは「日本製品をボイコットしろ」と言い、中国での日本の政策を非難した。

朝はアメリカに到着すると、カリフォルニア州での日本総領事から依頼された講演を行なった。そしてスーパー・チーフ——シカゴとロサンゼルスで4時間で結ぶ大陸横断鉄道でシカゴへと向かった。この鉄道は、1936年に開業したばかりで、朝も乗るのは初めてだった。目的地はシカゴ。大洋丸で知り合ったボートン夫妻に会うためである。朝は、手土産として日本の浮世絵を風呂敷に包み、ボートン家を訪れた。

ボートン夫妻は朝のために、スキヤキでもてなしてくれた。

パーティには先客がいた。ルイス・ラペル氏とその夫人だった。朝は、お土産がひとつしかないことに慌てたが、日本滞在経験のないラペル夫人に浮世絵をプレゼントした。

ラペル氏は初対面にもかかわらず、強い口調で日本を責め立てた。

「私は日本が嫌いだ。人類の敵だ」

朝は落ち着き払って反論した。

「あなたは日本の何を知っていますか？ 日本のことを何も知りもせず、好き嫌いを言う資格はありません。あなたの得た情報は、新聞からでしょうが、それが絶対に正しいと証明できますか？ あなたは自分の目で見たのですか？ なぜ東洋のことを知らないのに、日本を憎み、中国に同情なさるのですか？」

「なるほど、あなたは疑い深い聖トマスのような方ですね」

欧米では、「自分の目で見ないと何も信じない人」のことを「懐疑主義者トマス」と呼ぶ。ラペル氏は朝の態度をトマスに見立てたのだ。

朝はラペル氏に日本の立場を説明した。日本と中国との間に横たわっている問題、そして、アメリカの感情が日本から離れてしまっていることを、自分がどれだけ心配しているかということ。朝はできる限り丁寧に話した。

同時に朝は、ラペル氏の見解を興味深く聞いた。そこには、朝の知らなかった情報も数多く含まれていた。

ラペル氏は、朝と激論を交わしたというのに、ディスカッションもいよいよお開きという頃合いになると、「さあ、ナイトクラブへ行きましょう！」とにこやかに朝を誘った。

「私は、キリスト者禁酒同盟の会員ですので……」

やんわり断ると、「そんなことは今晚限り忘れなさい」とラペル氏は朝を強引にナイトクラブへと連れ出した。朝にとって初めてのナイトクラブ体験だった。帰り際、ラペル氏が朝に告げた。

「明日、私のオフィスを尋ねて来なさい。ランチをご一緒しましょう」

31

ルイス・ラペル氏のオフィスは、「最高の1マイル」と称されるミシガンアヴェニューの一角、いちばん高いビルにあった。エレベーターで、朝は氏の名を伝えた。

それはまるで魔法の呪文だった。

エレベーターを降りると、朝はどこかのお姫様のような扱いを受けた。ドアがいくつもあり、開くたびに深々と頭を下げられた。

最後に通された最も豪勢な部屋で、朝は「あっ」と声を出してしまった。

そこには壁一面に大きな油絵が飾ってあり、絵の中では、ラペル氏とフランクリン・ルーズベルト——現在のアメリカ大統領が談笑していたのである！ ルイス・ラペル氏はある新聞社の取締役だった。

ラペル氏は温かい笑顔で朝を迎えた。

「さあ、ここに座ってください。これからわが社の主筆や編集委員を集めますから」

皆が席に着くと、ラペル氏は部屋中をぐるりと見渡した。

「諸君！ 松岡朝さんを紹介します。こうした客人を迎え入れることができたのは、われわれの幸運です。新聞人として、日本のことを知ることは有益でしょう。諸君、腹藏なく思ったことをお聞きなさい」

多少の緊張は強いられたが、意見を表明する場を与えられたという意味で、朝にとっても有意義なランチであった。

ランチの後、ラペル氏は朝にひとつの提案をした。

「朝さん、あなたは日本人だが、長年アメリカで学ばれた。あなたにとってここは、第2の故郷でしょう。ですから私は、あなたをひとりの友人としてできうる限り助けてあげたいのです。……そうだ、あなたは女性だから、大統領夫人にお会いになるといい」

朝が驚いて固まっているのを見て、ラペル氏はにやりと笑みを浮かべた。

「トマスの朝さん、疑っていますね？ まあ待っていてください。来週、ルーズベルト大統領夫人がここシカゴに来る予定がありますから、その際、あなたのことを話しておきます。ホワイトハウスに招待するように、とね」

あとからわかったことだが、もともとラペル氏は、フランクリン・ルーズベルト大統領の側近で、政府の一員だった。現在は、大統領の命を受け、シカゴの新聞社を任されていた。

ラペル氏は、ルーズベルト大統領夫人の一件だけでなく、自分の手帳を開くと、その芳名録から、各地の有力者たちの名と連絡先をピックアップしていった。

「いいですか？ アメリカはPRの国です。自分たちの考えを通すために、大規模な宣伝活動を厭わないのです。逆に、黙っていては誰にも伝わりません。あなたは、いわば日本からやって来た平和の全権大使だ。あなたはこれから、新聞記者にどんどん取材してもらわなければなりません。写真を撮られ、インタビューをされ、そしてよく書いてもらう。それがあなたのいちばんの仕事です。もうひとつは、アメリカの人たちの友情を得ることです。ひとりの友人が、あなたに代わってあなたのメッ

セージを複数の知人に伝えてくれるでしょう。そのためには、あなたは日本への批判意見や見解も知らなければなりません。そのうえで、あなたのメッセージを発するのです。そうでなければ、何も成し遂げることはできませんよ」

ラペル氏は「私にできることなら何でも手伝う」と、朝のサポートを約束してくれた。

朝はシカゴからニューヨークへと向かった。

日本の駐米大使館を訪ねると、そこには一通の電報が届いていた。ルーズベルト大統領夫人からのお茶の招待状だった。

THE COMPANY WILL APPRECIATE SUGGESTIONS FROM ITS PATRONS CONCERNING ITS SERVICE

CLASS OF SERVICE This is a full-rate Telegram or Cablegram unless its deferred character is indicated by a suitable symbol above or preceding the address.	WESTERN UNION (34)	SYMBOLS DL = Day Letter NM = Night Message NL = Night Letter LC = Deferred Cable NLT = Cable Night Letter Ship Radiogram
--	---------------------------	---

R. S. WHITE PRESIDENT NEWTONS CARLTON CHAIRMAN OF THE BOARD J. E. WILKINSON FIRST VICE-PRESIDENT

The filing time shown in the date line on telegrams and day letters is STANDARD TIME at point of origin. Time of receipt is STANDARD TIME at point of destination.

Received at 664 Madison Avenue, New York 1938 APR 2 PM 1 34

NBN143 27 GOVT=THE WHITE HOUSE WASHINGTON DC 2 110P
MISS ASA MATSUOKA, CARE MRS THEODORE BLISS-
471 PARK AVE=

MR RUPPEL HAS WRITTEN THAT YOU ARE IN NEWYORK. MRS ROOSEVELT WILL BE GLAD TO HAVE YOU COME TO TEA ON TUESDAY, APRIL FIFTH, AT FIVE OCLOCK=
MRS J M HELM SECRETARY TO MRS ROOSEVELT.

BY DIRECT WIRE FROM

CLASS OF SERVICE This is a full-rate Telegram or Cablegram unless its deferred character is indicated by a suitable symbol above or preceding the address.	WESTERN UNION	SYMBOLS DL = Day Letter NM = Night Message NL = Night Letter LC = Deferred Cable NLT = Cable Night Letter Ship Radiogram
--	----------------------	---

R. S. WHITE PRESIDENT NEWTONS CARLTON CHAIRMAN OF THE BOARD J. E. WILKINSON FIRST VICE-PRESIDENT

The filing time shown in the date line on telegrams and day letters is STANDARD TIME at point of origin. Time of receipt is STANDARD TIME at point of destination.

APRIL 3, 1938

MRS. J. M. HELM
SECRETARY TO MRS. ROOSEVELT
WHITE HOUSE
WASHINGTON, D.C.

SINCEREST THANKS FOR YOUR KIND TELEGRAM STOP I SHALL BE HONORED TO BE PRESENT AT THE TEA ON TUESDAY APRIL FIFTH AT FIVE OCLOCK

ASA MATSUOKA

朝は大使館の車で、ホワイトハウスへと向かった。着物に帯、草履という出で立ちだ。応接室に通されると、案内役の女性が、しげしげと朝を見た。

「松岡さま、本日は大きなパーティがあって、エレベーターがたいへん混雑しております。ルーズベルト大統領夫人のお部屋まで階段で参ろうと思いますが、その履き物で階段を上がれますか？」

朝が履いている草履が気になったのだ。朝は笑って大丈夫な旨を説明した。

セオドア・ルーズベルト氏（第25、26代米国大統領）の肖像画が描かれたことで有名な階段を昇り、長い廊下を進んでいくと、突き当たりの扉の前には、白い手袋をはめた黒人の執事が立っていた。

執事の明けてくれたドアの中に、促されて朝はひとりで入った。そこは、ルーズベルト大統領夫人の部屋だった。そこには花模様のカバーがかけられた座り心地の良さそうな長椅子と肘掛け椅子が数脚あり、テーブルには白いレースがかけられ、銀のティーセットが用意されていた。部屋を見回すと、隅には本棚があり、その上には大統領のブロンズ像が置かれていた。花の生けられた花瓶がいくつもあり、非常に明るい雰囲気を出していた。朝は長椅子の隅に腰掛けた。

待つ間もなく、衣擦れの音がしたので、朝は急いで立ち上がった。

夫人は、歓迎の意を表すかのように、両手を広げて近づいてきた。笑顔が、朝の緊張を和らげた。「ごきげんよう。ミス松岡。今日あなたをホワイトハウスにお迎えすることをとても喜んでおります。お目にかかれて嬉しいわ」

「ご招待をいただき、身に余る光栄に存じます。お伺いできたのはたいへん幸せで、名誉なことでございます」

朝はルーズベルト大統領夫人に促され、椅子に座った。夫人は自ら紅茶を入れ、朝に差し出した。非常に洗練された手つきだった。

「ミス松岡、東京から遠路はるばる長旅でしたね」

「はい、奥様。約8000マイルです」

「ラペル氏がシカゴで、あなたについていろいろなことをおっしゃっていましたよ。あなたのこと『懐疑主義トマスのような女性だ。根拠のない意見には手厳しく反論する』と褒めていました。そして『自分を失望させないでほしい』と頼まれました」

まだ魔法の呪文は続いているのだろうか。大洋丸でのボートン夫妻との偶然の出会いが、トップレディにまで結びついてしまうとは！

朝は、できるだけ手短かに、朝が日本や中国、アメリカについて感じていること、考えていることを率直に述べた。ルーズベルト大統領夫人は黙って朝の話を聞いてくれた。朝は、

「お孫さんたちのために用意して参りました」

と銀のティーセットのミニチュアを手渡すと、

「このたびはたいへん光栄でした」

とその場を辞した。

その日の夜、朝は駐米大使館に報告に立ち寄った。夕食に招待してくれていたのだ。斎藤博駐米大使は、この件をことのほか喜んだ。大使は、日中戦争開始後に悪化した日米関係を憂慮し、改善に尽くしていた外交官だった（残念ながら、斎藤大使はこの1年後、心労がたたって亡くなってしまいが、アメリカ政府はその死を惜しみ、その遺骨を巡洋艦アストリアで護送させたほどだった）。

大使夫人が、朝の話を聞き、たいそう驚いた。

「朝さん、あなた、本当に上階へいらしたの？」

「ええ、大統領夫人の手づから、お茶をいただきました」

斎藤夫人の目にはみるみる涙が浮かんだ。

「あなたはホワイトハウスの上階のお住まいに招待された、最初の日本人ですわ」

33

日本に対して好意的であれ、そうでないにせよ、朝がアメリカで浴びせられるのは、日本の対中国政策への疑問だった。

「多くのアメリカ人は、戦争の病的な興奮状態になりかけています。太平洋にはどの国のものとも知れない潜水艦が、しょっちゅう現れているという噂が広がっています。人々は心配し、神経質になっています」

一方でアメリカは、戦争そのものに反対だった。

ある上院議員は、朝にこう意見を述べた。

「私はレーズベルト大統領のやり口には反対です。彼は軍事費をアップさせようとしている。われわれは国際的に中立な立場に立っている。自分たちの国を守る必要は認めるが、世界の治安を維持するための必要以上に強力な軍隊が必要だとは思えない」

彼は続けた。

「私たちは国防のためには喜んでお金を出す。しかし大事なのはアメリカ人兵士の命だ。大英帝国の保護のため戦うという馬鹿な目的のためには、1人の命も無駄にしたくないし、1ドルだって使いたくない」

朝は小さい頃、父に連れられて高野山に行った時のことを思い出していた。

ここの奥の院には、大きな「高麗陣敵味方戦死者供養碑」が建っていた。

16世紀末、豊臣秀吉は総勢16万人の兵で朝鮮半島を侵攻した。文禄の役（1592～3年）と慶長の役（1597～8年）である（朝鮮では「壬辰・丁酉倭乱」）。戦死者は膨大な数にのぼり、朝鮮半島の耕地は3分の1に激変し、5、6万人の朝鮮人が、日本に強制連行された。今日の歴史学では、これを「秀吉の朝鮮侵略」と呼ぶ。

その中に、島津義弘率いる島津軍7000人が、数万人の明・朝鮮連合軍と戦った「四川の戦い」がある。数に劣る島津軍は伏兵や奇襲を多用し、大軍を打ち破る。島津の名を轟かせた合戦だ。この時、明・朝鮮連合軍の死者は3万人とも8万人とも言われている。

島津義弘は朝鮮から帰国するとすぐに、「高麗陣敵味方戦死者供養碑」を建立した。自分の家来だけではない。敵味方の戦没者の菩提を葬うためだ。

これは当時としては異例の供養塔だった。実際、西南戦争の際に、敵味方の差別なく救護する目的で、日本赤十字社の前身「博愛社」が設立されるが、明治政府は当初、この団体の設立を許可しなかった。逆賊を助けることはまかりならん、という理屈だ。それでも有栖川宮熾仁親王の尽力で、同団体が立ち上がり、1887年（明治20）に「日本赤十字社」に改名される。ところが、今度は国際赤十字社から加盟を拒否されてしまう。博愛の精神が日本にはない、という判断だった。ようやく許可されるのだが、その理由は、「高麗陣敵味方戦死者供養碑」だった。300年近く前から、敵も供養していた日本人の心性が、赤十字の理念に相応しいとされたのだった。

朝は、日中戦争に心を痛めていた。

戦争は死者しか生まない。朝には、「高麗陣敵味方戦死者供養碑」を建てることはできない。だが、祈ることはできる。死者のために手をあわせることはできる。

朝は知人の車に同乗させてもらい、ワシントンD.Cの近くにある、アーリントン国立墓地を訪れた。ライフル銃を肩にかついだ衛兵が、墓地の前で行ったり来たりしている。朝は花束を手に持ち、墓地の入り口の衛兵に尋ねた。

「私は日本から来ました。この小さな花束を無名戦士のお墓にお供えしたいのです」

少し待たされた後、朝は衛兵から説明を受けた。

「私が中央ゲートの鍵を開けたら、あなたは中へ入って、お持ちの花を供えてください」

朝は小さなブーケを手に、戸惑っていた。仰々しい儀式を望んではいなかったが仕方がない。朝は勇気を持って、霊廟の前で進んだ。膝まずき、日本式に低く一礼をした。そして小さな贈り物を捧げた。

近くにアメリカ人の一団がいた。朝の行動を見ていたそのうちのひとりの女性が、近づいてきた。

「あなたは日本人？ それとも中国人ですか？」

「私は東京から来た日本人です」

「この墓地で、初めて日本人が敬意を表す姿を見ました。あなたの膝まずき方は美しい習慣ですね。私の息子は第一次大戦で戦死しました。それで今日はここへ来たのです。ここに眠っている無名戦士は、皆、自分たちの息子同然だと私たちは考えています。東京から来た外国人のあなたの振る舞い——私たちの息子たちにお辞儀をするのを見て、私は非常に感動しました。私はこの近くの学校の教師です。生徒たちに今日ここで起きたことを話します」

同じグループのひとりの老人がこう言った。

「多くのアメリカ人が日本人を嫌っているのを知っているでしょ？ 新聞はすべて、強い日本人が弱い中国人を攻撃していると伝えていますが。私は第一次大戦で戦いました。その当時、新聞報道はドイツに対する憎しみでいっぱいでした。20年前のことです。戦争が終わり、それが宣伝であることを知りました。今、私たちは日本が非人道的な国だと聞かされています。これが宣伝でない誰がいえるでしょう？ 私は今この目で、あなたの振る舞いを見ました。そうです、ドイツ人も、アメリカ人も、日本人も、同じ人間なのです。その事実が目覚める時だと、私は思いました」

たまたま居合わせた人たちの言葉は、朝を勇気づけた。

その場にいたアメリカ人たちが朝の元に近づいてきた。

「私たちのためにありがとう」

口々にお礼を言いながら、朝に握手を求める。朝は手がしびれそうになったが、それは心地好いしびれだった。

車で待っていた知人は、それを見て驚いていた。

「カメラを持ってこなかったのはとんだ失態でしたね（笑）。素晴らしい写真が撮れたでしょうに」

日本人が、すべて同じ人間でないように、アメリカ人もまた、ひとりひとり違うのだ。日本の立場を理解してもらうには、理ではない。理屈なしに心と心が触れあうことなのだ。小さなブーケは、見も知らぬアメリカ人の心を溶かしたではないか。

ラペル氏の言葉が蘇った。

「ひとりの友人が、あなたに代わってあなたのメッセージを複数の知人に伝えてくれるでしょう」

友人を増やそう。理解者を増やそう。朝は心を強くした。

34

満州事変以降、日本とアメリカの間には深く大きな溝ができていた。朝はそのことをアメリカではっきりと感じ取っていた。だがこれは不幸な溝だ。

アメリカ、中国、そして日本。

この3国は、ひとつの大きなトライアングルなのだ。どの点も重要であり、どの国も尊重されねばならない。トライアングルの安定こそ、太平洋地域の平和に繋がるのだ。

しかし、この三角形はゆがみ始めている。いつ点同士が衝突してもおかしくなかった。

朝は、父・健一の言葉を思い出していた。

「どんな争いに対しても、どちらか一方が間違っているということはない。0 か 100 ではないのだよ。自分が 50 なら、相手も 50。そうやって争いを治める心構えを持っていなさい」

3 国のどの国も納得できる解決の仕方はある。朝はそう信じていた。

朝は、ラペル氏が仕事でワシントンに来ていると聞き、お礼のために会いに行った。ラペル氏は満面の笑みで朝を迎えてくれた。

「私のトマスさん、ルーズベルト夫人に会えたでしょ？」

ラペル氏のウィンクに、朝は顔がほころんだ。大洋丸の船上で不安に怯えていたことが嘘のようだった。朝は今、「アメリカ」に出会えたのだった。

これからだ。私はアメリカと日本の掛け橋になる――。

朝は自分の使命を再確認した。

(つづく)

平成 28 年度事業報告書 ならびに 平成 29 年度事業計画案

※会計報告は別添とします

■平成 28 年度事業報告

1. 国際交流事業

平成 29 年春に、首都キャンベラの NGA (National Gallery of Australia) へ日本画 25 点の移管が決定した。当会が 1977 年の日本画贈呈受け入れ地として、首都キャンベラを希望したが、当時、大きな museum が、キャンベラになかったため、これまでの 40 年間は、Victoria 州メルボルンの NGV (National Gallery of Victoria) の保管であった。

1) 国と国との合意による移管なので、日本側としては今後、日本画を通しての事業を会の核とすることに理事会で決定。然し豪州のお国柄と日本とは温度差があるので、ことに文化交流はこちら側からの働きかけが絶対必要である。(この移管の成果の陰には、28 年 2 月 6 日～12 日に当会から、Gish 会長、霧生理事、羽鳥理事 3 名の訪豪があったわけである。)

2) 平成 28 年 4 月 12 日にオーストラリア大使館を訪問。シダル参事官から New Colombo Plan について知ることが出来た。今後、日本画の研修生招聘費用に活用できるかを考えていきたい。

2. 会報発行

会員との親睦、情報交換を図るため、年 2 回の発行を行った。また、その活動の中で「松岡朝物語 (仮題)」の取りまとめと会報誌への掲載をおこなった。会の創設者、松岡朝 (1893～1980) は、87 年の生涯を、祖国日本の文化を心から愛し、子供たちの将来の日本を案じて、国際親善に捧げた。一人の日本女性が残した数多くの活動秘話が、自筆の英文原稿に記されているのを見つけた私たちは、それらを翻訳してもらい、文章にまとめて後世に遺すことで、当会がなぜ創設されたか、そしてどのような活動を続けていくべきかを明確に示すことの意味を感じている。

3. つどい

『多文化社会オーストラリア—民族、歴史、将来への歩み』と題して開催。

一般的に関心が得られる内容かを心配したが、質疑応答も多数あり、好評であった。

講演者：飯笹佐代子 青山学院大学教授 日時：2017年1月21日（土） 13：30～15：30

出席者：22名

4. チャリティーコンサート

《テノール 大澤一彰が歌う世界の名曲》

平成28年10月28日（金）霊南坂教会にて、大澤一彰、西山昌子、有馬玲子

千年美奈子、間瀬利雄、飯靖子、有馬律子の7名の出演者によるチャリティーコンサートを主催。大澤氏の出演は今回で4回目だったが、毎回好評であった。

5. 東京ハルモニア室内オーケストラ支援

長年、当会主催のコンサートの支援を続けてくれており、文化交流にも大きく貢献している団体であり、平成28年度も引き続き支援を行った。

6. ホームページ等の充実

魅力ある情報源提供ができるように努力をしている。また、フェイスブックと連動させて、HPへのアクセス数アップも図っている。

以上

■平成29年度事業計画案

1. 国際交流事業

40年前、豪州との友好の礎として、日本画巨匠による25点を豪州国民に寄贈した。当時は首都キャンベラに25点を受け入れるmuseumがなく、メルボルンのNGV (National Gallery of Victoria) に保管されていたが、2017年に晴れてキャンベラのNGA (National Gallery of Australia) に移管されることに決定。キャンベラへの移管により、25点の日本画は当会当初の希望通りに全豪州の配下となった。

このことは、豪州と日本との国対国の合意で実現となったことから、今後も日本画にまつわる活動を会の核として、豪州との文化交流をより堅固なものに築きたい。そして、日本画数点なりとも常設してもらえるように働きかけていくことの推進を見守る意味からも、本年度中に理事が実際にキャンベラに赴き、視察・交流する予定である。

さらに文化交流推進に努めるため、以下の活動を行うべく project team を立ち上げることを予定している。

1) 研修生の短期招聘(しょうへい)

将来、豪州の若者が、日本画研修あるいは制作することを、奨励する立場の教員を招聘したい。また、New Colombo Plan (新コロombo計画) を現地大学が申請して日本での短期研修の費用とすることを考えたい。これまでに当会と関係があるメルボルン大学や、王立メルボルン工科大学 (RMIT)、及びキャンベラの大学に働きかけることから始めたい。

2) 50周年記念行事

来年(2018年)に当会は設立50周年を迎える。松岡朝物語(仮題)の完成をもって、記念行事とする。

2. 会報発行

会員に会の活動報告をする。その中で、会の創設者・松岡朝（1893～1980）に関する「松岡朝物語（仮題）」をまとめ、掲載する。日豪Press（在豪の日本語新聞）が松岡朝に強い関心を示している、特集を組みたいとのことなので、働きかけたい。

3. つどい

会員相互の親睦になるため、良い（かつ遂行上無理のない）企画提案がある時に行いたいが、今期は国際交流事業でのキャンベラ出張に出費が見込まれるため、基本的に開催しない予定。

4. チャリティーコンサート

“箏とハープ 東洋と西洋の響きの出会い”を主催する。以下はすでに決定済み。

日時：2017年9月29日（金） 場所：霊南坂教会

演奏者：マクイーン時田深山、有馬律子、西山昌子、有馬玲子、千年美菜子、間瀬利雄、飯靖子の7名。

5. 東京ハルモニア室内オーケストラ支援

引き続き、支援を継続していく。

6. ホームページ等の充実

Visual化拡大（映像のリンクなど）。活動の要点だけでも英文にて掲載したい。

以上

会費納入のお願い

年会費納入をお願いいたします。子ども達に、より良い日本を残すための当会の活動内容は現在まで高く評価されて参りました。これも皆さまのご理解があればこそでございます。引き続きのご支援をよろしくお願いいたします。

日本にあるものはオーストラリアには無く、オーストラリアにあるものは日本には無いと言われており、友好を深め、相互協力を推進することが重要な意味を持つ関係にあります。日豪両国の芸術専攻生の教育交流の発展や、オーストラリアやニュージーランドに寄贈した日本画の里帰り展の実現を通して、相互協力関係の深化を図りたいと思いますので、是非ご支援ください。

郵便振替 00130-2-366249 一般社団法人 海外と文化を交流する会
銀行振込 三菱東京UFJ銀行 渋谷支店（普）0026193 海外と文化を交流する会
会費 10,000円（正会員） 5,000円（特別賛助会員） 3,000円（学生会員）

海外と文化を交流する会事務局

〒151-0053 東京都渋谷区代々木1-27-6 パインビル内

TEL&FAX 03-3370-7654 e-mail: official@kaigai-bunka.org

<http://www.kaigai-bunka.org>